

木村喜一郎教授年譜

明治二十八年

四月十三日 京都伏見に木村小四郎の長男として生れる。母コウ。代々酒造業を営む

明治三十四年

四月 伏見南浜尋常小学校に入学

明治三十八年

四月 伏見彰徳高等小学校に入学

明治四十一年

四月 京都府立第二中学校に入学

大正二年

三月 蓄膿症を患い試験うけられず、卒業を認定せられる

大正三年

この年、能登和倉、紀州湯崎、伊勢津海岸、紀州高野山などへ転地、専ら肺尖カタルの療養につとめる

大正四年

四月 大阪高等商業学校に入学

大正五年

十月 腸チブスにかかる。凡そ百日ほど臥床する

大正七年

三月 大阪高等商業学校卒業、家業を手伝う。

大正八年

九月 京都大学に経済学部が新設せられたのを機会に入学する。独経を選択す。

大正九年

十月 京都栗田口、松宮ヤエと結婚する。

大正十年

七月 宇治黄檗万福寺山田玉田老師につき参禅しはじめる。爾来三十年機会ある毎に入室参問して諸縁放棄の志を棄てず。

大正十一年

入学期が四月に繰上げられたので在学の実際期間二

年半となる結果が生じた。それで殊更科目をとらず卒業をのばす。

六月 長男 純生れる

大正十二年

十月 学士試験合格。つづいて大学院入学。財部教授の指導の下に統計学を専攻す。

大正十三年

六月 長女 鈴生れる

十一月 長男純夭折する。法名を温光至純孩子と自ら撰した。

大正十四年

十一月 二女 文生れる。

大正十五年

四月 大阪高等商業学校講師を嘱托せられ、研究科授業担当する

昭和二年

五月 三女 福生れる

昭和三年

三月 京都大学大学院退学

九月 大阪高等商業学校教授に任ぜられる

十二月 急性肺炎にかかり凡そ五十日臥床した。死生の境を放復すること旬日に及ぶ

昭和四年

七月 伊勢白子の雲心院に暑を避け翻譯に従事する

昭和五年

六月 泉州高師浜に新居をいとむ

十月 経営学研究のため、伏見丸にて印度洋經由渡欧する

十二月 仏国巴里滞在

二月 伊太利北部各地巡遊する

昭和六年

三月 独乙伯林に移る。商科大学ニツクリツシユ教授を訪い訳書を敬呈する。併せて翻譯権料千馬克払う

九月 西南独乙、瑞西、奥太利各地巡遊する。

昭和七年

二月 英国倫敦に移る。滞在中しばしば牛津劍橋の
大学に到る。又蘇格蘭に遊びアダム、スミスの生誕地
カーコーデーを訪う。

九月 室戸台風、津波に襲われる。屋敷浸水し床上
一尺に及ぶ。
昭和十年

二月 ヤエ癌転移によつて死亡。法名を自ら撰する。
花修院妙香日重大姉。

八月 米國に渡る。紐育よりボストンに到り、ケン
ブリッヂに居を卜す。ハーバード経営管理大学院の研
究室図書室に出入する。

昭和十五年

十二月 シカゴを経て羅府より浅間丸に乗船横濱に
帰着する。

十月 宮城外苑で行われた紀元二千六百年祭典に参
列する

昭和十六年

昭和八年

十一月 堺市熊野町 上林久子と再婚する

四月 大阪商科大学助教教授兼高商部教授に任ぜられ
る。

昭和十八年

二月 二男 新生れる

十月 高師浜新居増築落成する。これより家族と共
に常住することになる。

九月 父死亡享年七十才。家督相続したが企業整備
の問題起る

昭和九年

十月 大学教授に任ぜられ兼任を解かれる

七月 妻ヤエ乳ガンにつき堺病院に入院し保々輝雄
氏により手術を受ける。

昭和十九年

三月 家族と共に高師浜を引揚げ伏見に常住するこ

とになる。

十月 家業は伏見銘醸株式会社と合同し継続することとなる

昭和二十年

十一月 長女 鈴 京都府八幡町中村敏樹に嫁す

昭和二十一年

三月 大阪商科大学を退職する

四月 大阪女子専門学校専任講師となり経済科の授業を担当する

昭和二十三年

四月 二女 文 大阪市天王寺 太田通太郎に嫁す

十一月 四女 雪生れる

昭和二十四年

四月 同志社に商学部の新設せられるのを機会に教授となる

昭和二十五年

五月 三女 福 大阪府南河内郡 梅川勉に嫁す

木村喜一郎教授年譜

昭和二十六年

五月 富山大学文理学部非常勤講師をつとめ経済科授業担当する

昭和二十七年

十月 立命大学教授を専任として経済学部授業を担当する

昭和二十九年

十月 大蔵省の許可を得て醸造権を向島酒造株式会社へ分離移動させ家業の継続を計る

昭和三十年

四月 立命館大学経済学部長就任

九月 伊勢孤野智福寺鐘楼落慶につき山田玉田老師に賀辞を叙ぶ。今年八十六の寿をかさねられる。

二八一(七二七)

木村喜一郎教授研究業績

著書

ニックリツシュ
経営経済原理

昭和五年四月

文雅堂

企業経済の構造と
機能

昭和十七年六月

日本評論社

新企業家精神

昭和十八年三月

修文館

社会統計概説

昭和二十四年四月

三和書房

会计学講義案

昭和二十五年四月

三和書房

レットル商品

昭和二十七年十月

三和書房

—その経済理論—

論文

京都大学「経済論叢」

静大量と動大量

二九卷一号

物価指数に関する一論

二九卷二号

大阪高等商業学校「商業及び経済研究」

オイレンブルグ社会と自然

第四十一冊

オイレンブルグ自然法則と社会法則

第四十三冊
第四十九冊

デゼーク統計学の結構について

第四十二冊

統計的研究法の本質に就て

第四十四冊

私経営統計の重要

第四十五冊

商事経営論上二三の根本概念について

第四十六冊

統計学と大数の法則

第四十七冊

統計的大量

第五十冊

ハルムス教授の各箇経済論

第五十二冊

統計理論と統計技術

第五十三冊

「経営研究」

企業の立場

第一卷二号

百貨店経費の調査実例

第一卷三号

ニックリツシュ教授の会计学説

第二卷四号

財務現象

第二卷五号

Absatz と Umsatz

第三卷一号

ニックリツシュ経営学の解説

自第四卷一号
至第五卷三号

企業経済をめぐる二三の方法論的問題

第六卷一号

利潤の私経済観

第六卷二号

経営理論に関する断片

第七卷 一号

レットテル商品の特殊形態

第九卷 一号

大阪商科大学「経済研究年報」

経営共同体と其実現

第十三卷 四号

Selbstfinanzierung に就し

第四号

雑

他人資本の一考察

第七号

調達過程製出過程販売過程

第十号

金融現象と財務現象

経営経済研究
昭和十年五月号

大阪商科大学経済研究所「経済時報」

企業計算に於ける全体主義的思想

會計
昭和十五年十一月号

第二回国勢調査に際して

第二卷 六号

労資一体精神

社会政策時報
昭和十七年九月号

日本製鉄株式会社

第五卷 十二号

商業機能の交遷

法商研究
昭和十七年十月号

事業と退職積立金制

第七卷 七号

公企業の種々相

財政
昭和十七年十二月号

事業と臨時工

第八卷 九号

危険について

第一卷 二号

事業と法律

第八卷 十二号

附加価値

第二卷 一号

大阪商科大学「経済学雑誌」

流動性と貸借対照表

第二卷 二号

Betriebsfonds に就し

第一卷 五号

P・Rのアメリカ的性格

第三卷 三号

企業者と経営者

第二卷 一号

ゼイフェルト「商業の経済学」

第三卷 四号

レットテル商品について

第四卷 二号

品質と角逐力

第四卷 二号

レットテル商品と定価制

第五卷 四号

暖簾とレットテル商品

第四卷 四号

利潤と企業経済

第八卷 一号

木村喜一郎教授研究業績

二八三(七一九)

立命館経済学（第四卷・第四号）

資本の効率

第五卷 一号 自己金融。

「立命館経済学」

ツアイス工場

第三卷 二号

フオード五十年

第三卷 七号

岩波書店 「経済学辞典」

執筆項目

経営経済。

経営経済学。

国際的科学的管理法会議。

経営統計。

家計調査。

経営組織。

財務管理。

平井泰太郎編 「経営学辞典」

執筆項目

ニックリッシュの経営 経営経済 企業概念。

参加資本。